野球チームのファンの内集団協力に関する 場面想定法実験¹

中川 裕美 横田 晋大 中西 大輔 広島修道大学

Ingroup cooperation among Japanese baseball fans of a team in a vignette experiment

Yumi Nakagawa, Kunihiro Yokota, and Daisuke Nakanishi (Hiroshima Shudo University)

This study aimed to test the validity of social identity theory (SIT) and bounded generalized reciprocity hypothesis (BGR) to explain ingroup cooperation in real social groups. Each of the validity of SIT and BGR have been discussed by social psychologists for a long time. However, recent studies indicate that both theories could explain ingroup cooperation simultaneously. Nakagawa et al. (2015) showed that ingroup cooperation among Japanese fans of a baseball team was derived from the psychological mechanisms predicted by both theories. The present study tested the reproducibility of these results when the cost of cooperation was emphasized. Japanese fans of all 12 baseball teams ($N = 1,635$) participated in this experiment. In each scenario, the cost of helping was emphasized, and reciprocal expectation was manipulated by knowledge about the feeling of belonging by participants and their partner's group. The results showed that ingroup cooperation was shown by the psychological mechanism of BGR more than SIT when the cost of cooperation was emphasized.

Key words: ingroup cooperation, social identity theory, bounded generalized reciprocity hypothesis, real social groups.

The Japanese Journal of Psychology

2019, Vol. 90, No. 1, pp. 87–92

J-STAGE Advanced published date: December 25, 2018, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17335>

本研究は現実に実在する集団における内集団協力²を検討することを目的としている。内集団協力を説明した主要な理論に社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory: 以下, SIT とする; Tajfel & Turner, 1979) と閉ざされた一般互酬仮説 (Bounded Generalized Reciprocity Hypothesis: 以下, BGR とする; Yamagishi & Kiyonari, 2000) がある。両理論それぞれの妥当性は長

年議論されてきた (Tajfel & Turner, 1979; Yamagishi & Kiyonari, 2000) が, 近年, これらは必ずしも相互背反ではなく, それぞれの理論が記述する心理過程が独立して内集団協力を促進するという主張がなされている (中川他, 2015; Stroebe, Lodewijkx, & Spears, 2005; 横田・結城, 2009)。

本研究の目的は, 実在する集団の一種である野球チームのファンを対象として SIT と BGR それぞれの心理過程が独立して働くとの立場から内集団協力を検討することにある。中川他 (2015) による場面想定法実験では, 両理論の心理過程の働きにより内集団協力が生じた。本研究は中川他 (2015) を踏襲し, 協力のコストを加えても結果が再現されるか追試を行う。

SIT と BGR

Tajfel, Billig, Bundy, & Flament (1971) は些細な基準で集団を分類する最小条件集団パラダイム (Minimal Group Paradigm: 以下, MGP とする) を用いて, 自己が集団を同一視すれば内集団協力が生じることを明ら

Correspondence concerning this article should be sent to: Yumi Nakagawa, Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hiroshima Shudo University, Ozuka-higashi, Asaminami-ku, Hiroshima 731-3195, Japan. (E-mail: ynakag32_1372@a.shudo-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は, 日本社会心理学会第 55 回大会にて発表された。

² 中川・横田・中西 (2015) と本研究で測定した内集団協力は, 内集団ひいきに含まれる。内集団ひいきには内集団協力と外集団差別の 2 つの側面があり, 近年その背後にある心理過程は異なることが指摘されている (Brewer, 1999)。そのため, 内集団ひいきの説明原理を額面どおり内集団協力の生起プロセスに適用するには, 今後の検討が必要である。

かにした。その後、集団同一化が協力行動を引き起こすと主張する SIT が提唱された。SIT は「人々には社会的環境に関する主観的な構造化や、望ましい集団に対する所属の欲求が組み込まれている」という前提に基づく (Taylor & Moghaddam, 1994 野波・岡本・小杉訳 2010)。個人は内集団に同一化すると集団を通じて肯定的な自己の欲求を満たそうと動機づけられる。そのため、内集団を外集団より優れた存在とみなし、内集団協力が生じる。つまり、SIT に基づく内集団協力は集団同一化からもたらされる。

一方、適応的な視点から内集団協力を説明する BGR により SIT の反証が試みられた。BGR によると内集団協力は集団内の一般交換関係を維持し集団内の互恵的な関係から排除されることを防ぐために生じる。一般交換関係が成立する集団内では、内集団成員に協力をすれば、いずれ他の内集団成員から返報されるとの互恵性が期待できる。協力しない場合、今後、集団内で利益を享受できなくなる。その逸失利益が長期的には非協力による搾取の利益を上回るため、協力が適応的な行動となる。よって、内集団協力の生起要因は、BGR では他の内集団成員からの互恵性の期待となる。

実在集団を対象とした研究

MGP を用いた研究とは対照的に、実在する集団における SIT と BGR の妥当性を同時に検討した研究は数少なく、両理論が支持されない結果が得られている (牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi et al., 2005)。実在する集団を対象とした研究の多くは SIT の妥当性のみを検討対象としており (Gallagher & Cairns, 2011; Liebkind, Henning-Lindblom, & Solheim, 2006), BGR の妥当性が支持されたものはほとんどない (牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005)。実在する集団において BGR の心理過程が抑制される理由の 1 つに、内集団成員からの評価懸念 (牧村・山岸, 2003a) や外集団の存在の顕現化により生じるステレオタイプ、規範 (牧村・山岸, 2003b) などの混交要因の影響が挙げられる。また、SIT と BGR の妥当性を同時に検証することができない研究デザインでは、両理論の心理過程の働きが相互相反か、独立して働くかが判断できない。

以上の問題点を改善するため、中川他 (2015) は実在集団において混交要因を統制した上で、SIT と BGR の妥当性を同時に検証できる実験デザインを構築した。実験は野球チームのファンを対象とした場面想定法実験により行われ、両理論の心理過程がそれぞれ独立に働き内集団協力を引き起こすことが示された。しかし、中川他 (2015) のシナリオでは協力にかかるコストが明示されていなかったため、非協力の誘因が弱く、内集団協力が生じやすかった可能性がある。した

がって、本研究では中川他 (2015) を踏襲した上で、コストを明示しても結果が再現されるか追試を行う。

野球チームのファンにおける内集団協力

中川他 (2015) は、広島東洋カープのファンを対象に内集団協力を検討し、SIT と BGR の妥当性を示した研究である。中川他 (2015) と本研究が野球チームのファンを対象集団とした理由は 2 つある。野球チームのファンにはライバルのチームと常に勝敗を競い合い (Berendt & Uhrich, 2016)、ファン同士の頻繁な交流がある (Yoshida, Gordon, Heere, & James, 2015) ことから、同一化が強く互恵性の期待も高いと期待されることが 1 つ目である。

2 つ目に、野球チームのファンの集団行動を検討することが、集団間葛藤をもたらし心理過程の理解につながると考えられるからである。例えば、Rabbie (1982) は集団間競争に含まれる要素として次の 6 つを提唱している。(a) 異なる集団への分類、(b) 内集団成員間での共通運命性の共有経験、(c) 集団内での相互作用またはその予期、(d) 集団間競争／協力の予期、(e) 集団間競争において相互に欲求不満が生じる集団間の相互作用、(f) 外集団との勝敗の経験やその予期である。野球チームのファンには、(a) 応援するチームごとにファンが分類される、(b) チームの勝利に向けて応援をする、(c) 球場や日常場面でファン同士が交流する (Yoshida et al., 2015)、(d)、(f) ライバルのチームと常に勝敗を競い合う (Berendt & Uhrich, 2016)、(e) 勝敗に感情が左右されやすい (Harrell, 1981) という性質があり、これら 6 つの要素を兼ね備えている。野球チームのファンの集団行動を検討することで、集団間葛藤をもたらし心理傾向の解明に貢献すると考えられる。

上記 2 点を踏まえ、両理論の心理過程の働きを同時に検討するにあたって相対的に妥当な集団として野球チームのファンを採用した。

中川他 (2015) の場面想定法実験では、シナリオ内に登場する相手 (第三者) への援助の行動意図を内集団協力として測定した。さらに、援助場面では清成 (2002) に基づき援助する相手と自分の応援するチーム (所属集団) が認識できるか否かにより、互恵性の期待の有無を操作した。実験の結果、SIT と BGR が支持され、両理論それぞれの心理過程の働きにより内集団協力が生じることが示された。しかし、前述の通りそこでは協力にかかるコストが明示されておらず、非協力の誘引が弱かった。

協りにコストがかかると、BGR の心理過程の働きが強くなると予測される。Kiyonari, Tanida, & Yamagishi (2000) では、取引の単位にポイントまたは金銭を用いた四人のジレンマゲームを行い、社会的交換の感覚を操作した上で協力行動を測定した。金銭は

ポイントと比べ、協力行動にかかるコストが明示されている。その結果、金銭では互恵性の期待に基づく協力行動がみられたが、ポイントではBGRで説明される行動パターンが示されなかった。

以上より、協力のコストを強調し、社会的交換の感覚を強く認識させると、BGRが主張する互恵性ベースの心理過程が強く働くため、中川他(2015)の結果が再現されない可能性がある。したがって、本研究では実在集団の対象を大学生から一般人の野球チームのファンに拡大し、協力のコストを明示した追試を行う。

方 法

実験時期・参加者

実験は2014年2月13日から16日にかけて実施された。Web調査会社のマクロミルに登録されたアンケートモニターから3,096名(男性1,488名、女性1,608名)をランダムにサンプリングした。参加者のうち応援チームのある野球チームのファン1,635名(男性937名、女性698名)を主な分析に用いた。ファンではないが比較的好きなチームを選択したファン以外1,461名(男性551名、女性910名)は比較データとして使用した。野球チームのファンの平均年齢は50.93歳($SD = 15.57$)であった。回答の謝礼には、金券や現金に交換できるポイントが付与された。

実験デザイン

中川他(2015)を踏襲し³、互恵性の期待の有無(清成, 2002)を集団所属性の知識によって操作した上で、援助期待／援助行動のシナリオを提示した。シナリオに登場する参加者と第三者のBさん(相手)が、参加者の応援する野球チームのロゴマークが入ったTシャツを着ているか否かで集団所属性の知識を操作した。互いに相手が同じチームを応援するファンだと分かる内集団相互条件、参加者のみ相手が同じチームを応援するファンだと分かる内集団一方条件、相手のみ参加者が同じチームを応援するファンだと分かる不明内集団条件、互いに所属集団が分からない相互不明条件を設定した(参加者内配置)。

集団所属性の知識の操作 援助期待／援助行動のシナリオには、参加者と面識の無い第三者のBさんが登場した。各条件に共通して互いに相手の所属性を推測している図とともに「各シナリオではあなたもシナリオに登場するBさんも〇〇チームのファンです」

と教示された⁴。〇〇には参加者の応援する／比較的好きなチーム名が入る。その後、内集団相互条件では「あなたもBさんもお互いに〇〇チームのファンである」と分かる、内集団一方条件では「あなたはBさんが〇〇チームのファンである」と分かるが、Bさんからはあなたがどこのファンであるか分からない、不明内集団条件では「Bさんはあなたが〇〇チームのファンである」と分かるが、あなたからはBさんがどこのファンであるか分からない、相互不明条件では「あなたもBさんも互いにどこのチームのファンか分からない」と教示された。

シナリオの内容 援助期待／援助行動のシナリオでは、他者又は自身が困っている日常場面を想定させ、「あなたがBさんを助けると思う程度」(援助行動)と、主語を反転させ「Bさんがあなたを助けてくれると思う程度」(援助期待)を測定した(5件法)。シナリオでは4つの援助場面を想定させ、協力にかかるコストをそれぞれ明示した。各コストの内容は「道を教えると仕事に遅れる」、「荷物を拾ってあげる間に欲しい惣菜が売り切れる」、「怪我人のBさんに席を譲ると40分間立つことになる」、「Bさんが排水溝に落としたカギを取ってあげると友人との待ち合わせに遅れる」であった。

集団所属性の知識条件は4つの援助場面それぞれに設定し、各条件で提示するシナリオは同一であった。つまり、参加者には4(集団所属性の知識条件)×8(援助期待4場面／援助行動4場面)の全32パターンで回答を求めた。また、相互不明条件を設定したシナリオに回答した後、内集団相互条件、内集団一方条件、不明内集団条件それぞれを設定したシナリオに対して順序をランダム化した。援助期待と援助行動のシナリオに回答する順序についてもカウンターバランスをとった。

手続き

参加者に応援する野球チームがあるか否かを尋ねた後、日本プロ野球機構が定める12球団を提示し、最も応援するチーム／比較的好きなチームを1つ選択するよう求めた。応援するチームの有無にかかわらず、参加者は全て同じ質問項目に回答した。野球チームとの同一化(Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009)および援助行動／援助期待のシナリオ内にある「〇〇ファン」には、選択したチーム名を当てはめて回答す

³ 中川他(2015)に記載の条件名は、相互(内集団相互)条件、自知(内集団一方)条件、相知(不明内集団)条件、不明(相互不明)条件である。

⁴ 本研究は「あなたとシナリオに登場するBさんが、内集団成員である」ことを告げ、本当は内集団成員同士であるが、もしその情報を知らなければ(あるいは知っていれば)どのように行動するかを尋ねた。内集団成員同士であると伝える(清成, 2002)ことは、参加者が相手の集団所属性をデフォルトで勝手に推測する可能性を排除することができる。

るように教示された。好きなチームを選択した者はファンに当てはまらないが、ファンのデータと比較するため同じ項目への回答を求めた。

野球チームとの同一化は、「自分が典型的な〇〇ファンであるとされたら気分がいい」、「〇〇が好きだ」などの 13 項目で測定した (5 件法)。同一化項目には、内集団への好意的な感情や集団へのコミットメントを測定する項目が含まれる。この値が高いほど、自己と内集団の存在を多面的に同じものと見なし集団に強く同一化していることを示す。同一化を測定した後、援助行動／援助期待のシナリオによって各条件の内集団協力を検討した。

結 果

以下の分析には HAD 16_050 (清水, 2016) と R3.5.0 (R Core Team, 2018) を用いた。まず、援助行動におけるシナリオ 4 場面のクロンバックの α 係数を求めたところ、4 場面で十分な内的整合性が得られたため ($\alpha > .72$)、全項目を合算し援助行動得点とした。同様に、援助期待も十分な内的整合性が得られたため ($\alpha > .78$)、全項目を合算し援助期待得点とした。

応援するチーム⁵による援助期待／援助行動の違いを検討するため、援助期待／援助行動を従属変数、集団所属性の知識条件と応援チームを独立変数とした分散分析を行ったところ、援助期待 ($F(11, 1623) = 1.04, p = .41, \eta^2 = .00$)、援助行動 ($F(11, 1623) = 0.70, p = .74, \eta^2 = .00$) とともに有意なチームの主効果は得られなかった。したがって、以下の分析ではチームを区別せず検討を行う。

同一化項目 ($\alpha = .93$) の合計平均は、野球チームのファン ($M = 42.15, SD = 8.16$) の方がファン以外 ($M = 28.24, SD = 10.15$) より高く、野球チームのファンは内集団との同一化がより強いことが分かる ($t(3094) = 42.20, p < .01, d = 1.52$)。

援助期待／援助行動

Table 1 にファンとファン以外の各条件における援助期待／援助行動得点の平均を示す。互恵性の期待の操作を確認するため、援助期待を従属変数、集団所属性の知識条件を独立変数とした分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった ($F(3, 4902) = 202.46, p < .01, \eta^2 = .02$)。Holm 法にて条件間の下位検定を行うと、内集団相互条件が内集団一方、不明内集団、相互不明条件より高かった。不明内集団条件は内集団一方・相互不明条件より援助期待が高く、内集団一方条件は相互不明条件より高かった。内集団相互条件で援

Table 1
援助期待／援助行動得点

		ファン <i>M (SD)</i>	ファン以外 <i>M (SD)</i>
援助期待	内集団相互	12.97 ^a (3.00)	12.16 ^d (3.19)
	内集団一方	11.99 ^c (2.83)	11.38 ^c (2.94)
	不明内集団	12.44 ^b (2.87)	11.71 ^b (3.00)
	相互不明	11.87 ^d (2.76)	11.24 ^d (2.85)
援助行動	内集団相互	14.17 ^a (2.82)	13.33 ^a (3.07)
	内集団一方	13.77 ^b (2.77)	13.07 ^b (2.97)
	不明内集団	13.56 ^c (2.83)	12.95 ^c (2.96)
	相互不明	13.76 ^b (2.70)	13.09 ^b (2.92)

注) 上つき英字は Holm 法による下位検定の結果である。援助期待／援助行動においてそれぞれ英字が異なれば、群間に差があることを示す ($p < .01$)。

助期待が最も高いとの結果は、清成 (2002) と一貫しており互恵性の期待の操作は成功した。

次に、援助行動を従属変数とし集団所属性の知識条件を独立変数として分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった ($F(3, 4902) = 76.44, p < .01, \eta^2 = .01$)。条件間の下位検定 (Holm 法) を行うと、内集団相互条件が内集団一方、不明内集団、相互不明条件より高かった。内集団一方・相互不明条件の間に有意差はなく、不明内集団条件より高かった⁶。中川他 (2015) と同じく内集団相互条件で最も協力的になったが、内集団一方・相互不明条件における協力行動に差がみられなかったことから中川他 (2015) の結果は部分的に再現された。

さらに、ファンか否かを独立変数に入れた分散分析を行ったところ、ファン以外でも条件間のパターンはファンと同様の結果が得られた (援助期待: $F(1, 3094) = 52.30, p < .01, \eta^2 = .00$ 、援助行動: $F(1, 3094) = 52.77, p < .01, \eta^2 = .00$) が、援助期待と援助行動は全ての条件でファンよりも有意に低い値を示した (Table 1)。

互恵性の期待の効果

内集団協力の背後にある心理過程を明らかにするため、同一化と各条件における援助行動の相関係数を算出した後、援助期待を統制した偏相関係数を算出し

⁵ 12 チームのファンの内、読売ジャイアンツファン ($N = 456$) が最も多く、オリックス・バファローズファン ($N = 17$) が最も少なかった。

⁶ 不明内集団条件で援助行動得点が最も低かったことは、両理論から説明ができない。ただし、不明内集団条件と内集団一方条件／相互不明条件間の援助行動得点の差の t 検定では、両条件ともに効果量が同じで小さかった ($d = .07$)。上記からも、不明内集団条件における得点の低さを解釈することは困難であった。

た⁷。中川他 (2015) と同様に、同一化と援助行動の関連が疑似相関であるとの主張 (Yamagishi & Kiyonari, 2000) に基づけば、援助期待 (互恵性の期待) を統制すると同一化と協力行動の相関関係が消失するはずである。同一化と援助行動は、内集団相互 ($r = .23$)、内集団一方 ($r = .21$)、不明内集団 ($r = .18$)、相互不明 ($r = .19$) 条件の全てに有意な正相関 ($p < .01$) が得られた。さらに、援助期待を統制した偏相関分析では、全条件で同一化と援助行動の関連 ($rs \leq .13, p < .01$) が弱まった。

各条件の相関／偏相関係数との差を z 検定した結果、全条件で相関係数より偏相関係数の値が有意に低かった (内集団相互: $z = 3.82, p < .01$; 内集団一方: $z = 2.35, p < .05$; 不明内集団: $z = 2.90, p < .01$; 相互不明: $z = 2.34, p < .05$)。内集団相互条件でみられた相関係数の差が最も大きく、他の 3 条件での差はその条件より小さかった。すなわち、内集団相互条件では援助期待が援助行動に与える効果が強かったと言える。ただし、同一化と援助行動の関連は援助期待を統制しても消失せず弱い正相関が残存した。

考 察

本研究では、Web でのデータ収集により 12 球団それぞれの野球チームのファンを対象とし、中川他 (2015) のシナリオに協力のコストを明示した場面想定法実験を行った。中川他 (2015) では、内集団相互条件で相互不明 (統制) 条件よりも協力的になり、続いて内集団相互条件よりは低い、内集団一方条件でも相互不明条件より協力的になった。

協力のコストを明示した本研究では、中川他 (2015) と同じく内集団相互条件で相互不明条件よりも協力的になったが、内集団一方条件と相互不明条件における協力は再現されなかった。条件間のパターンから、協力のコストが明示されると SIT よりも BGR の心理過程が強く働くことが示唆された。この結果は、メタ分析から BGR の心理過程が優勢であると結論づけた Balliet, Wu, & De Dreu (2014) の主張と一貫する。

また、内集団協力の背後にある心理過程を解明するため、同一化と援助行動の関連を検討した。援助期待を統制変数として投入すると、同一化と援助行動の関連は全条件で弱まり、その程度は内集団相互条件で最も大きかった。ただし、援助期待を統制しても同一化と援助行動の関連は消失せず弱く残存した。以上から、

協力のコストは、相対的に BGR が説明する心理過程の効果を高めたと示唆されるが、同一化の効果が残存したことから SIT が説明する心理過程も働いた可能性はある。

本研究の課題

本研究で測定した援助行動・援助期待の値は、ともに条件間の差が小さく、効果量も小さかった。その理由の 1 つに、教示を読み飛ばした不誠実な回答者がいた可能性が挙げられる (三浦・小林, 2015)。このことから、今後の実験では Web 調査には一定の限界があることを考慮し、集団所属性の知識を直観的に想定できる測定方法 (映像など) に工夫する必要がある。また、本研究では協力のコストの有無を直接操作していないという限界がある⁸。シナリオで提示した協力のコストの種類は多様であり、各コストを誘因として認識した程度は測定していなかった。したがって、コストの種類を考慮した上でコストの有無を操作する追試を実施するべきである。

さらに、上述したように内集団協力には同一化の効果が弱く残存した。この結果は、野球チームのファンはデフォルトでは SIT の心理過程から内集団協力を行っていることを示唆する。ただし、今回の結果だけでは、野球チームのファンの行動原理を SIT に求めるのは早計である。SIT の心理過程を活性化させる要因の 1 つに外集団脅威がある (横田・結城, 2009)。そのため、競争的であるが野球チームのファンと質的に異なる集団 (ライバル関係にある県) や競争が比較的少ないと思われる集団 (音楽ファン) を対象とした比較を行うことで、本当に野球チームのファンのデフォルトの行動原理が SIT で説明されるかを検討すべきであろう。

協力のコストにより BGR の心理過程が SIT よりも強く働いたとの知見は、何らかのコストがかかる現実の内集団協力には BGR が適用されやすいことを示唆するものである。しかし、まだ両理論の外的妥当性を保証するには多くの課題が残されている。そのため、今後は実在集団の性質を考慮した上で、SIT と BGR の心理過程を活性化させる状況要因と内集団協力との関連性を精緻化させる必要がある。

利益相反の開示

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

⁷ BGR の主張するモデルでは、互恵性の期待が内集団協力の究極因で同一化などの心理的要因は近接因とされており (Yamagishi & Kiyonari, 2000)、互恵性の期待が同一化と援助行動を規定する。したがって、互恵性の期待と同一化の効果を検討する重回帰分析ではなく、上記のモデルの検証に適した互恵性の期待を統制できる偏相関分析を行った。

⁸ 協力のコストの有無は操作していないが、本研究で測定した援助期待／援助行動得点は、全条件でコストを明示していない中川他 (2015) より低かった。

引用文献

- Balliet, D., Wu, J., & De Dreu, C. K. W. (2014). Ingroup favoritism in cooperation: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 140, 1556–1581.
- Berendt, J., & Urich, S. (2016). Enemies with benefits: The dual role of rivalry in shaping sports fans' identity. *European Sport Management Quarterly*, 16, 613–634.
- Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, 55, 429–444.
- Gallagher, E., & Cairns, E. (2011). National identity and in-group/out-group attitudes: Catholic and Protestant children in Northern Ireland. *European Journal of Developmental Psychology*, 8, 58–73.
- Harrell, W. A. (1981). Verbal aggressiveness in spectators at professional hockey games: The effects of tolerance of violence and amount of exposure to hockey. *Human Relations*, 34, 643–655.
- Hogg, M. A., Fielding, K. S., Johnson, D., Masser, B., Russell, E., & Svensson, A. (2006). Demographic category membership and leadership in small groups: A social identity analysis. *Leadership Quarterly*, 17, 335–350.
- Kaiser, C. R., & Pratt-Hyatt, J. S. (2009). Distributing prejudice unequally: Do whites direct their prejudice toward strongly identified minorities? *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 432–445.
- 清成 透子 (2002). 一般交換システムに対する期待と内集団ひいき——閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究—— 心理学研究, 73, 1–9.
- Kiyonari, T., Tanida, S., & Yamagishi, T. (2000). Social exchange and reciprocity: Confusion or a heuristic? *Evolution and Human Behavior*, 21, 411–427.
- Liebkind, K., Henning-Lindblom, A., & Solheim, E. (2006). Ingroup favoritism and outgroup derogation among Swedish-speaking Finns. *Nordic Psychology*, 58, 262–278.
- 牧村 洋介・山岸 俊男 (2003a). 成員間に相互作用がある集団における集団間報酬分配に関する実験研究 心理学研究, 73, 488–493.
- 牧村 洋介・山岸 俊男 (2003b). 集団カテゴリーと集団間行動——国籍カテゴリーを用いた実験研究—— 21世紀COE「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.19, 1–18.
- 三船 恒裕・牧村 洋介・山岸 俊男 (2007). 国籍カテゴリーを用いた「閉ざされた一般的互酬性仮説」の検証 21世紀COE「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.68, 1–10.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタの Satisfice はいかに実証的知見を毀損するか 社会心理学研究, 31, 120–127.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討——広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験—— 社会心理学研究, 30, 153–163.
- Rabbie, J. M. (1982). The effects of intergroup competition and cooperation on intragroup and intergroup relationships. In V. J. Derlega & J. Grzelak (Eds.), *Cooperation and helping behavior: Theories and research* (pp. 123–149). New York: Academic Press.
- R Core Team (2018). *R: A language and environment for statistical computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. Retrieved from <https://www.R-project.org/> (July 24, 2018)
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59–73.
- Stroebe, K., Lodewijkx, H. F. M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and social identification as determinants of ingroup favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 831–845.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149–178.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33–47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Taylor, D. M., & Moghaddam, F. M. (1994). *Theories of intergroup relations: International social psychological perspectives* (2nd ed.). Westport, CT: Praeger.
- (テイラー, D. M.・モグハッドム, F. M. 野波 寛・岡本 卓也・小杉 考司 (訳) (2010). 社会的アイデンティティ理論 (pp. 59–92) 集団間関係の社会心理学——北米と欧州における理論の系譜と発展—— 晃洋書房)
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63, 116–132.
- Yamagishi, T., Makimura, Y., Foddy, M., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow, M. J. (2005). Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. *Asian Journal of Social Psychology*, 8, 173–190.
- 横田 晋大・結城 雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性——内集団ひいきの生起過程の多重性—— 心理学研究, 80, 246–251.
- Yoshida, M., Gordon, B., Heere, B., & James, J. D. (2015). Fan community identification: An empirical examination of its outcomes in Japanese professional sport. *Sport Marketing Quarterly*, 24, 105–119.

—— 2018. 1. 12 受稿, 2018. 9. 15 受理 ——